

なぜ今、美術批評において「超合金座標軸」が必要なのか

現在、現代美術はまだ触れたことのない、はじめて聞くようなものとして誰かから紹介されるものではなくなっている。かつては言葉＝批評を通して現代美術が広い読者に紹介されるという状況もあったのだが、誤解を恐れずにいうなら、これは今日まったく等しい状況だ。

一方で、現代美術は薄く、ファッション・音楽・映画など、ほかの文化の情報流通を通して間接的に「多くのひとに伝わっている。他方で、現代美術界」の内部で作品を批評的に解説する営みはあるが、それらはおおむね、閉じられたサークルや専門家集団を読み手としているものだ。

その中間として、美術館などに赴いた時の作品解説があるではないか、という向きもあるだろうが、あれも観光における視覚情報に言葉を付属させるというサービスの域をでないものにましますなっているのが両者の橋渡しはならない。

「このように、批評」と紹介が深い関連のあるものだという前提は今日崩れている。しかし、知っている「このように」についてはなんでも意見交換し議論したい立場からみると「このこと」はなんとも奇妙に感じられるはずだし、要領のいいものによって「現代美術」というプレイグラウンドなど言語活動においてまったく呪われていると感じられる「このように」ながるはずだ。

■

美術批評は、現代哲学・政治思想などの情報と表現・感性・美学についての「情報の交点」にあるとみなされる。だが今日では現代美術の「薄く伝わっている」「イメージや観光の付属としてのサービス性の前提を超えて批評が「情報の交点」である」として「むしろ人を遠ざけるパターンがおおいのではないか」と思われる。「こうした反応にはもともと必要とされないわけではない。そもそもアカデミアの問題であるが、ある希少で前提知識が必要な書物からの情報を共有する人間同士の結びつきでは、それ自体において排他的である」。

また「現代」が冠されることで、そこにある種の時事性に触れ続けることが必要であり、それについていくための見る側の時間的・金銭的負担が前提となってくる。「このように、現代美術批評の共有とはその意味で二重にも三重にも排他的」でありうる。今日、情報が「排他的」であるとは、需要者が時代の潮目をみてポップな「プレイヴァ価値」のなにかを手にいれたことでの顕示以外ではいかなる意味でも正統性が見出しづらくなっている。その意味でも現代美術についての「排他的な言論」などというのはあらゆる意味で「藪蛇」である。

もちろん、言語的「紹介」などなしに直にギャラリー・美術館に赴いて、その場に散らばっている符丁を理解して現代美術に親しむ行為が少なからずの人に行われていると考えられる。だが、ゲーム理論的なそれにおいても、より感性的な作品理解においても、そうした行動はどこかで「文化資本」的優越感のひそかな刺激がともなっているものであり、それを超えて開いていく「このように」する営みとは断絶されているように思える。それは裏を返せば、よりパ

ブリックな意味での「文化資本」の顕示がなくなったということでもある。

海外作家が日本で展示し、あるいは日本の新進作家がある狭いサークルにおいて紹介される「という」とはあり、またそこで狭いサークル以上の広がりの人々を「非言語的」に巻き込み感性的な、あるいはゲーム的な化学反応がいまでも生起し続けているとはいえるだろう。

そうした状況に純粋な出会いと喜びがないとは言えない。だがそれも、知名度を得れば得るほどに、そうした情報に触れている不特定多数の間での「プレミア価値」を増すための言説に最終的には「取り巻かれること」において単に気取ったものともみなされる運命であろう。つまり言説を介さないことによって状況を解決しようとしてもそれはどこかで悪い意味で帰ってくるのだ。

嘆いているばかりではなにもはじまらない。このように現代美術の紹介において、ほとんど腐れ縁ややっかいものという位置に言説／批評が立たされることの前史が振り返られなければならない。

まず、ある程度の堅固な枠組みが、たとえば国民国家文化圏のなかでの政治風土と文化の動きが言語で結びついてきた時期というのがあった。この時に海外の「先進的」文化と政治を交錯させる言論は、読者を選ぶような「排他的」なものというより、読み手が自身のなかで前提を問い直しアクティブになるための必要であることがいまだ了解されていたはずである。現在からみて、それが少なからずロマン主義的な幻想に過ぎなかったとしてもだ。

1960年代中期以降に徐々に入り口がみえ、そして冷戦の終結において決定的となった「グローバル化」の進展で文化についての事情は大きく変動する。皮肉なことに、国の枠を超えてどのような新しい文化動向にでもアンテナを向けられるということがかえって疑心暗鬼の状況をもたらす。こののも「ここではかつてなら誰かによる文化的な紹介」と呼ばれたものが、みずからの属する政治的・文化的風土に有利な材料を海外の議論から恣意的に持つてくる「という」と直結するのに誰もがいやでも気づかされることとなるからだ。

その意味でモダンな党派的対立問題が引用における「文化戦争」として、ポストモダン（レイトモダン）による「みがかえってくるのである。」「ついでに短絡的な言い争いで文化の趨勢を決めようとする気風が蔓延する」となる。原理的に誰もそれから「言語的に「逃げる」とはできない。以上の結果として、今日では、自称中立的であるとするものは、原理的に「新しい事象」を紹介することはできない。

なぜなら「第一に、すでに情報化のなかで「紹介」されている」と「これに関してそれ以上に情報の交点」となる」とを自認して深めようとする態度は、ポップな「プレミア価値」という誘因なしでは聞く耳を持たれないからだ。第二に、新しく見慣れない「という」とは前衛の印ではなく文化戦争的に対立する二者のどちらかに我田引水のための新しい武器が渡される

兆候としてネット上を巡回する人工衛星のようなユーザー監視の眼に捉えられるからだ。

所謂「現代思想」系の文化論者がどうしても既知のもの（「石子順造のいうところのキツチユなもの」）を論じる傾向におちいつてくるのは、本人の資質の問題も多分にあるであろうが、「こいつした外部の圧力によって議論を不可避に水路付けられる」ところが少なくないといえる。

例えば、現在『インロン』を発行していることで現代美術に積極的に関わる東浩紀はポストモダン文化を巡る論争の渦中に1990年代からいたわけであるが、今日の状況を見ると彼の美術・アートに関する議論には共感が持てないものの、少なくとも彼が渦中にあることで可視化してきたものは現在にいたる傾向の小規模で先駆的なケーススタディーであったと言わなくてはならないだろう。

もはや「先進的」批評は疑心暗鬼に燃料を投下しつつ、それが存在する前から分断され続けている他人同士の言語的関係のなかで、より抽象的なものなかに捕まえられることによつてしか存在できない。「このように考えていく」と「批評によって現代美術を紹介する」とは事実上不可能になってしまった景色がすでに目の前に山々のように聳え立っている、私には思える。

■
玉子をアールの上にも立てるような意味で議論をひっくり返して可能な道を探るなら、単純にアカデミックな言語的材料による結びつきを「元々の 美術批評的」「帰属をなくしてしまふ」「こいつが考えられる」。

今日言語的な関係がわかりやすく分断されているというとは、逆説的にいえば「マニマックな言語的材料への帰属はかつて重んじられていたかもしれないが今日のポチッとパソコンやスマホにつなげば出てくる「コンビ」的な帰属によって所詮置き換えられるものでしかなかったゆえに本質的でなかった」とみなせるのだ。であるから、そうした「マニマックな帰属は勝手にフィードバックしてくるお知らせの方に「外部化」したうえで、それ以外の「つながり」の要素について考えた方が言語活動的に健全でありうる。

だがいこうまでもなく「このようにして不可能を前に去来する一瞬の感情的な解放のようなアイデアは、それ自身に瞬間的な正当性がいくらか含まれていようと、も言語において固定化するような作業を通じた結果としてはいかなる意味でも失敗するであろう。

「こいで、安易に解放たれてしまわないで、かといって昔の枠に戻らないようにして取り組める材料が必要である。それは何であるか。それは既に行われてきた批評の問題だ。であるので今あえて私なりのやり方で「敗戦後美術批評」を検証したいと考える。

方向性としては現在二つ考えている。私は、だれもがとはいわないが、多くの人が知っている戦後美術の作品、作家、テーマのなかにびっしりと知られていない「批評の文脈が埋め込まれていた」ところを論じてみたい。あるいは、今日、敗戦後の文化的論争で名高いといわれているもののなかに、いかに世間的・コミュニケーション的な紹介というプロデュース

の動機が働いていたか、についても検証し現代美術の問題に還流させたい。「このようにして、既知でもあり未知でもあり、それぞれによつての虫食い部分を補って検討できるような、言論をとおした結びつき」といふものを新たに生み出したいと考える。

■
もちろん 敗戦後美術批評」の内容は断片的に知られていてもその「文脈」はあまり知られていないので、それを紹介するといふニーズを単純に満たしたいといえれば、前述のように言葉を浪費する必要はなかった。だが、それを新しい切り口で呈示し、話を聞いた人だけに特別な関係性がわかる「よこにな」といえば、すぐにマニッシュな材料をもとにした言語的な「現代美術」の結びつきに回帰してしまふといふことがある。ハーゾ「アナ分析とハーゾ」アナ分析を次々に融合・錬成させて議論の「硬度」をやみくもに上げていった結果、思わぬ方向からかけられた力に簡単に「ホッキリ」と折れやすい「批評言語」が育ぐまれるだけなのだ。

私はこうしたものではない美術批評の検討の場を作りたいと考える。刀剣類を作るときにそうするように、合金とは単に硬度を上げるだけでなくある柔軟度も上げることとその強靱さが生まれるようにするものごとだ。「ここからはG・D岡本との企画名を考えたりとりに絡んだ話になるが、「超合金」という名称は、ある種のオタク的な現代美術のプレゼンテーションが、その「中二病的なテーマの強調において勢いがあること」に対抗したいという思いもあつて岡本から発案されたものである。しかし同時に、柔軟でもあるような強度への希求とは、今の言論の現状からは「中二病的」にしか思い描けないものであるといふことでもあるのだと感じさせる点で、「この言葉を美術批評」と掛け合わせるのはアイロニーがあつて非常におもしろいと感じている。

もつと岡本から批評企画に際して議論になったこととして野球に強くなるためにはまず野球場を持つ必要があるといふことであり、そのために身近で足を我々が付けざるを得ない戦後日本美術批評」を問題を作りたいといふ話があった。ところで、野球場は柔軟にプレイヤーの活動を包含するものである一方で、明確に図表的な構造に区切られてもいる。であるので、柔軟でもある超合金の座標という「概念」を今回の企画名としてみた。

実際にやってみない限りどなるか分からないですが、上記のような感じで美術批評についての読み直し、検討会を行いたいと考えていますので、ぜひみなさんご参加ください。